



## 優秀賞

書評 網野善彦著 『古文書返却の旅：戦後史学史の一齣』（中央公論新社, 1999）  
（081/4-1503/H）

文学部1年 三浦直人

素材のままでは食べられないものがある。適切な調理を施さないと、消化不良を起こしてしまうものがある。ともすれば忘れがちなことだが、こうした加工を担う人々がいて初めて、食材は我々の前にその姿を現わす。この原則は何も食べ物に限った話ではない。学問や知識といった分野にも、十分通じる教訓なのだ。その最たる例が、歴史学における「古文書」である。

本書は、「古文書」という食材が、「歴史」という完結した料理に昇華されるまでの過程、いわば裏舞台を、調理人たる歴史家の視点からひもといた作品だ。我々が日頃目にする「歴史」は、すでに加工されて味わいやすくなったものなのだ、ということが実感できる名著である。

敗戦後の激動真っ只中の1949年。東京月島にある水産研究所のメンバーは、全国の漁村から史料を蒐集するという、遠大な研究計画を抱いていた。日本史上における漁業の全貌を明らかにしようというのである。若き日の著者・網野善彦も、その史料集めに奔走した一人だ。やがて各地から借用・寄贈された膨大な古文書によって、信じられない数の段ボール箱が積み上げられるに至った。

しかし、いつしか借用した文書の返却期限が迫り、計画自体の予算も打ち切られてしまう。それは彼らの熱意溢れる大計画の挫折であった。と同時に、膨大な古文書の返却という大仕事も、最優先事項として残ってしまった。著者が一連の出来事を「失敗史」と位置付ける所以である。

研究所解散後、高校教諭、後には名古屋大学教授として職務を全うする著者。しかしその胸中には常に、いつかあの古文書を処理せねば、という義務感があった。神奈川大学に活躍の場を移し、腰を据えて文書整理に精力を傾けよう、という決意を固めたのは、1980年のことである。かつての水産研究所は、日本常民文化研究所として同大に招致された。

対馬、茨城、瀬戸内海、能登、東北……。史料返却の過程で紡がれる、史料提供者との温かい再会の物語。先輩研究者の業績に思いを馳せ、その足跡を辿る旅路。歴史というドラマの舞台裏を彩るのは、表舞台の輝きに負けない人間ドラマの数々である。

普段我々は、加工品の歴史ばかりを相手にしている。そのこと自体は何も悪いわけではない。しかし、その生産過程をすっかり忘れ去っているのであれば、それはかまぼこが魚のすり身であることを知らない子供と同じ構図である。「歴史」が紡がれる過程に向き合う大切さを、この本は伝えてくれる。もしかすると他の網野作品同様、歴史家のメガネで見た歴史を、ただ無批判に受容することの危険をも、説いてくれているのかもしれない。供給されるものを受け取る側から、いつかは自分も古文書を調理する側へ……。そんな夢を抱かせてくれる一冊でもある。